日本医史学雑誌第四十八巻第四号
平成十四年十二月二十日発行　平成十四年四月二十日受付

田代和生著『江戸時代朝鮮薬材調査の研究』へのコメント

――科学史の立場から提出されている史料を読む

山田慶兒

1　はじめに

田代和生教授は長年にわたり、江戸時代に日朝間の外交・貿易を担当した対馬藩の「宗家文書」にとりくみ、近世日朝関係史の研究に専念してこられた。二〇年近くまえに刊行された『近世日朝通交貿易史の研究』（創文社、一九八一）は、釜山に置かれた対馬藩の活動拠点倭館（日本人民留区域）における、外交・貿易活動に焦点をあて、「一八世紀中期まで盛大に行われていた日本銀の大量取引の事実を明らかに」された仕事だという（本書四ページ）。

このたび出版された『江戸時代朝鮮薬材調査の研究』（慶應義塾大学出版会、一九九九）は、徳川吉宗の命により、享保三年（一七一八）、六年（一七二一）、一七年（一七三二）の三回にわたっておこなわれた「朝鮮薬材調査」をとりあげ、その詳細な事例研究をとおして、たんに外交・貿易にとどまらず、制度・社会・文化面にまでわたって、「日朝関係の実像に迫」（五ページ）ろうとされた大作である。この薬材調査は、実施されたことすらこれまで学会にはまったく知られておらず、朝鮮人参の苗や種子を手に入れて、ゆくゆくは国産化し、やがて全国物産調査を開始するという吉宗の大事業の

前段階であったことも、ここにはじめて明らかにされた。調査のさいに描かれた動植物の絵のカラー図版をはじめ、豊富な関連史料も収録されており、その内容には、日朝関係史のみならず、また外交・貿易史にとどまらず、医学史・薬学史・博物学史・絵画史その他の文化史の諸分野から動植物分類学の専門家にいたるまで、大きな刺激を受け、研究意欲をそそられずにはいないだろう。歴史研究に新生面を開いた力作といってよい。「江戸時代の薬材や医学書、医師といった」、まったく予備知識のない、「内容がいまひとつ理解できない」史料（四九〇ページ）にあえて挑戦し、ここまで消化して、みごとに成果を収められた田代教授に、心から敬意を表したい。

たまたまわたしは『社会経済史学』の編集委員会から本書の書評の依頼をうけた。日朝関係史や外交・貿易史に暗いわたしがあえて書評を引き受けたのは、科学史の立場からみてきわめて興味深い問題がとりあつかわれているというだけでなく、この問題にかかわる従来の科学史研究の成果が残念ながら、かならずしも田代教授の研究に見合うだけの精密さと高さに達していない、と感じたからである。そのことを指摘し、問題点を明らかにして、教授の仕事に応えることは、科学史家としての義務であろう。そのために、納得できないところを調べたり、メモをとってみたりしたのだが、その内容は、あたえられた書評の枚数には到底収まりそうにもない。そこで思いきってそれだけをまとめることにした。

江戸時代の科学史については、わたしは二、三の文章を書いたことがあるが、あまり精しくない。李朝時代の科学史にいたっては、数学や天文学の著作に二、三目を通したことがあるにすぎず、ほとんど無知にひとしい。とりあげた史料は、本書のなかに提出されているものにかぎられる。以下にわたしが述べることを、読者はかぎられた資料からの素人の性急な論断ととらずに、ひとつの問題提起と考えてくださるよう希望する。肯定されるにしろ否定されるにしろ、江戸期や李朝期の科学史の専門家によって具体的に検証されることを、わたしは期待している。

2　『東医宝鑑』湯液篇

一五九六年から宣祖の命によって編纂がはじまった『東医宝鑑』（許浚撰、一六一三）は、田代教授の紹介によれば、「朝鮮医学の最高峰」と評価されている書であり、「この書の出現によって、朝鮮医学が統合され、確立されたといっても過言ではない」。そのなかで「薬材を網羅した湯液篇は、……中国の本草学の影響を受けながらも、編纂過程からみて李時珍の大著『本草綱目（五十二巻、一五九六）には直接影響されておらず、朝鮮本草学の独自の到達成果とされている」（十九ページ）という。また、ある韓国の科学史家によれば、湯液篇の薬材は一四二〇種、うち鉱物薬一四三種、動物薬種四五二種、植物薬七四六種であり、中国産薬材は一〇二種しかふくまれていないという。[1] 朝鮮医学史上における『東医宝鑑』出現の意義について、わたしはべつに疑義をさしはさむつもりはない。とりわけ編纂開始の時期が、慶長の役という困難のさなかであったことを思えば、たんに科学史のみならず、文化史上における偉業にあったといわなければならない。医学理論の面から、民族医学（東医学、韓医学）の樹立、[2] とたたえられるのは、けだし当然だろう。とはいえ、湯液篇の記載がどのように中国本草書の影響を受けているか、またどのように独自の記述をおこなっているかについては、なお具体的に検討する余地がある。

さいわい田代教授は、「史料編Ⅱ　品目調査一覧」に、第二次調査品目一〇四種について、湯液篇の説明を全文収録しておられる。禽部十二、獣部六、魚部四、虫部五、果部八、菜部九、草部四十三、木部十七の品目である。全十五部のうち、水・土・穀・人・玉・石・金の各部はふくまれていないが、動植物の薬物はまずまんべんなく選ばれていると考えてよい。そこで、湯液篇の記載の全体的な傾向がそこに投影されていると仮定して、これらの説明文をくわしく見てゆくことにする。

各条文は、まず漢語の品名の見出しにつづいて、相当する朝鮮語の名称があれば、ハングル表記される。逆に、ハン

グル表記のない場合は、朝鮮では一般に知られていなかった品目とみていいだろう。ハングル表記がないのは、一〇四種のうちの三一種、三割に達する。その三一種について調査状況をみると、

朝鮮に産せず　九種
捕獲・採集不能　十二種
薬局より搬入　七種
倭館の近くで採取　一種
その他　二種　（史料編Ⅱ）

となっている。薬局より搬入したものは、薬草園などで栽培されていたものであろうか。倭館の近くで採れたのは鮒魚であり、あとで述べるように、朝鮮では別名で呼ばれていたらしい。先に紹介した、中国産薬材は一〇二種にすぎないという説は、一体いかなる根拠に本づくものであろうか。

ちなみに田代教授が、

湯液篇にでてくる一万四〇〇〇種類（一千四〇〇の誤り？）におよぶ薬材名には、（中略）漢名の下に固有語をハングル表記して、物名を自国語で確認できるようになっている。このことは、朝鮮では薬材に用いるほとんどのものが同定できていたことを意味する。（六三ページ）

と書いておられるのは、いささか勇み足であろう。ハングル表記のないものがある、というだけではない、ハングル表記があるからといって、同定が厳密であり正確であることにはならない。なにも朝鮮だけのことではない。ツバキと椿、ショウブと菖蒲が似ても似つかない植物なのは、あまりにも有名だ。

第二次調査のさい、倭館では朝鮮側の協力者が提供した物を図に描き、報告書に添えて提出した（本書には現存する四四枚が原色版の図録として収められている）。第三次の調査を幕府側で担当した本草家の丹羽正伯が、そのうちの十種あま

りについて、誤りを指摘したり、疑問を呈したりしている（史料編II）。たとえば、漏蘆について、

朝鮮ヨリ指上候図説ハ此方ノ川原ザイコニテ、萎薩菜ト申草ニテ、漏蘆ニテハ無之候、

としたうえ、

元来諸本草ノ註甚混雑仕リ、弁シカタキ物ニテ候、一種ハ此方ノタムラサウニテ候、

と本草の漏蘆の条に記載されているものの一種について、同定をおこなっている（三九七―三九八ページ）。その正伯の同定にも、今日からみれば誤っているものがいくつもあるという（図録編参照）。同定がいかにむずかしい作業であるか、その意味でも朝鮮薬材調査がいかにたいへんな事業であったかを、本書はおのずと物語っている。そこで湯液篇にかえれば、ハングル表記のないもの三割という数値を湯液篇全体にも適用できると仮定して、全品目の七割の薬種について自国名を表記できたということは、かりにそこに多くの誤りや混乱がふくまれていたところで、そのこと自体が十七世紀初頭における朝鮮医学の蓄積の厚さとすぐれた力量とをしめすものではあるまいか。

品名につづいて薬物学的および博物学的な記載に入り、中国の本草書や医書にみえる品目については、中国書の説明文を適当に選択し、内容を取捨し、短く刈りこんで採録している。品目によっては、補足的な説明をたいていは文末に、ときには中国書からの引用文のあいだに割り込ませて、「俗方」として記入する。「俗方」という指示がないばあいもあるが、それは書きかたや内容からすぐ判別できる。中国書にみえない、朝鮮国内産の品目については、むろん「俗方」のみを記載する。一〇四種の説明文について、引用書の書名と俗方の有無を具体的に検討した結果をまとめたのが、表1である。

湯液篇は従来の通説に反し、『本草綱目』を基礎にして編纂されている。『綱目』の元になった宋の『証類本草』（大観・政和の両刊本があり、ここでは『政和本草』を用いたが、湯液篇はあるいは『大観本草』に依ったのかも知れない）の文を採用していることもある。それは編者が、李時珍の採録しなかった記述を、必要と考えたためである。この両者を合わせて、

出典は「本草」と指示されている。品目の約六割には、「本草」以外の宋・元・明代の医書・本草書が引用されている。たとえば、『綱目』についで引用の多い、明の李梴の『医学入門』（一五七五）についていえば、内集巻二・本草の文である。「本草」以外からの引用文のみの品目も五つある。「本草」に採択されるにはいたっていないが、医者が実際に用いていた品目である。

これからみれば、説明文は『本草綱目』を中心に中国の本草書・医書から取捨選択して引用したものを主体としており、編者の個性はその取捨選択のしかたに求められる[3]、と一応言っておいていいだろう。

表1の下のほうに集めた「俗方」は、すでに述べたように、編者が独自に立てた新収品（国内産）の説明文か、または中国書からの引用文につけ加えた説明文である。湯液篇の分類法は中国方式に依っているから、「朝鮮本草学の独自の到達成果」はこの「俗方」にある、と考えていいだろう。まず史料編IIに収められた品目の「俗方」の全文を列挙しよう。番号は田代教授が調査項目順に付せられたもの。中国本草書（『政和』・『綱目』）に関連する記載があれば、（　）内に付記する。番号を〔　〕でかこんだのが新収品である。

13　麋脂　青麋、大鹿也。（李時珍・綱目・集解　麋似鹿而色青、大如小牛。）

21　銀條魚　疑今之銀口魚也。

22　鮰魚　疑是今之民魚。

〔25〕　土桃蛇　此蛇黄色、在土窟中、入秋則鳴吼、其声遠聞。取肉燒灰酒服、治大風諸風疥癩一切風。

32　橘皮　我国惟産済州、其青橘柚子柑子皆産焉。

35　橙　今之橙糖即此也。

37　胡葱　味似葱而不甚辛。疑是今之紫葱也。

38　野蒜　性味功用略与小蒜同。多生田野中、似蒜而極細小。人採食之。（蘇頌・図経　蒜、小蒜也。……今處處有之、

表 1　『東医宝鑑』所載調査品目104種の説明文の構成

書名	綱目	政和	入門	湯液	丹心	正伝	三因	得効	医鑑	日用	本事	資生	銭氏	俗方	条数
説明文の構成（引用とその組み合わせ。原書では「綱目」と「政和」は「本草」として一括）	○														41
		○													8
			○												1
										○					1
	○	○													1
	○	○	○												2
	○	○	○				○				○				1
	○		○												14
	○		○		○										2
	○		○	○											3
	○		○						○						1
	○		○		○			○	○						1
	○		○			○									1
	○				○										2
	○			○											3
	○							○							1
	○											○			1
	○												○		1
														○	4
	○													○	6
	○		○	○										○	2
	○		○	○	○									○	1
	○			○										○	2
	○			○			○							○	1
		○												○	1
			○			○								○	1
					○	○								○	1
計（%）	87（83.7）	13（12.5）	30（28.8）	12（11.5）	7（6.7）	3	2	2	2	1	1	1	1	19（18.3）	104

本草綱目（明）　政和（証類）本草（宋）　医学入門（明）　湯液本草（元）　丹渓心法（元）　医学正伝（明）　三因極一病証方論（宋）　世医得効方（元）　古今医鑑（明）　日用本草（元）　普済本事方（宋）　資生方？　銭氏小児薬証真訣（宋）

生田野中。根苗皆如葫而極細小者、是也。また図経　葫、大蒜也。）

〔40〕木頭菜　性平無毒。煮作茹作葅食之佳。處處有之、春初採之。

〔41〕白菜　性平無毒。取莖煮作羹茹甚佳。處處種之。

52　藍藤　處處有之。根如細辛、即今藍漆也。（陳臓器・拾遺　生新羅國。根如細辛。）

57　麻黄　自中原移植于我国諸邑、而不為繁殖。惟江原道慶尚道有之。

63　藁本　我国慶尚道玄風地有之。

81　白附子　本経云生新羅、即我国所産。今在處有之。（新修本草注　此物本出高麗。）

81　羌活　我国惟江原道独活羌活俱産焉。

87　五味子　我国生咸鏡道平安道最住。

89　呉茱萸　我国惟慶州有之、他處無。

92　紫檀　我国江原道多有之。

98　無患子　我国惟済州有之。

この十九品目はつぎの四類に分けることができる。

（1）名称の同定　21・23・35・37・52

（2）産地の特定　32・57・63・81・86・87・89・92・98

（3）品目（物）の説明　13

（4）新収品　28・38・40・41

同定の37　胡葱の「味似葱而不甚辛」は植物の性質の記載ともいえるが、ここではむしろ同定に必要な知識として記述されている。57　藍藤の記述は陳臓器そのままである。品目の説明の　13　麋脂は、実際の観察に基づいたのでなく、おそら

く李時珍の記載に依ったのであろう。なお、産地の特定の 57 麻黄は、「中原自り我国の諸邑に移植するも、繁殖を為さず、云々」と説明されているが、まったく同様な表現が、のちに調査品目に追加された甘草のばあいにもみられる（二二六ページ）。

自中原移植於諸道各邑、而不為繁殖、惟咸鏡道所産最好。

この定型表現はなにを意味するのだろうか。たんに中国からの渡来品ということなのか、それとも比較的近年、薬用植物として意図的に、政府または個人の手で移植されたというのであろうか。興味のあるところだが、むろんこれにはすでに研究があるのかも知れない。

問題は「俗方」の二割強を占める新収品である。25 土桃蛇は、色・生息場所・声が一応記載されているものの、長さ・大きさ・頭の形・牙・足・模様など、中国の本草書にふつうにみられる博物学的観察がなく、記述の力点は薬の製法・用法と薬効に置かれている。38 野蒜の博物学的記載は、蘇頌の文章にみえる葫と蒜の関係を、そのまま蒜と野蒜に横すべりさせたかたちである。40 本頭菜と 41 白菜では、博物学的関心がまったくみられず、記述は食べることにもっぱら向けられている。

中国では時代が下るとともに、本草書のなかで博物学的記載の占める比重がしだいに増えてゆき、明代以後、薬物学のなかから徐々に博物学といえるものがすがたをあらわしてくる。この傾向は江戸時代の日本ではとくに著しく、最初の体系的な本草書である貝原益軒の『大和本草』（一七〇九）がすでに、薬物学から完全に脱皮した博物学書であった。吉宗の朝鮮薬材調査も本草研究のこの流れのなかから生まれた企図であり、田代教授の指摘によれば、吉宗は「薬物学的な報告」でなく、「むしろ薬を「物」としてとらえ、その形状・色彩・性質・名称をあまねく考証して調べる、いわば物産学・博物学的な成果を求めていた」（八五ページ）という。博物学へ向かった中日両国のこの潮流に対比するとき、「俗方」の記載の特徴がきわだってくる。

その特徴はつぎの二点に要約できよう。

（1）朝鮮国産の品目にかんする記載である「俗方」は、調査品目の約二割弱にみられ、主として名称の同定と産地の特定にあてられている。

（2）新収品すなわち朝鮮の特産品は、その「俗方」の約二割強を占め、記載内容は主として薬物（または食物）としての製法・用法、そして効用に向けられている。

（1）・（2）は要するに薬物学的記載である。食用になる部分や食べかたの記述は中国の本草書にもごく普通にみられるが、ここではとくに野蒜・木頭菜・白菜のいずれも菜部に分類された野菜であるのに注意しよう。（1）・（2）をあわせて別の言葉で表現すればこうなる。

（3）調査品目の「俗方」から見るかぎり、記載は薬物学の枠を固く守っており、そこから脱して独自の博物学へと向かう萌芽は認められない。

『本草綱目』に流れこみ、またそこから流れだしていった中国の本草、とりわけ『本草綱目』の刺激のもとに開花していった日本の本草の豊かさは、薬物学の流れとはべつに、博物学を誕生させるにいたったところにある。対象の形態や生態の緻密な観察と記述、写生と標本の作成、そこに博物学の本領がある。とくに日本では、しばしば医師がみずから山野を跋渉して薬物の採集にあたり、また玄人はだしの画才をもち、趣味や職業として研究にたずさわる、本草家と呼ばれる専門家が輩出した。図の作成には画家が協力することも少くなかった。現に朝鮮薬材調査にも画家が参加している。公私の薬草園が各地に設けられたのは、いうまでもない。

朝鮮ではかなり事情が違っていたようにみえる。医師が直接に薬物の採集にあたることはほとんどなく、薬材の供給はもっぱら薬材商の手にゆだねられていたのではあるまいか。薬材商が医師に提供するのは、むろん加工品であって、生きている動植物ではない。薬物学としての本草書、すなわち薬方書はいろいろ書かれており、そこには薬にかんする

すぐれた記述が数多くみられるにちがいない。しかし（わたしの記憶に誤りなければ）、図とりわけ彩色図をもつ博物学としての本草書はついにあらわれなかった、とかつてある韓国の科学史家にうかがったことがある。朝鮮の知識人が画筆をもつことさえ（まして薬物採集など、というべきか）卑しむべき手仕事とみなしたことに、それは深くかかわっているというのである。ともあれ、「俗方」の記述は調査品目にかんするかぎり、博物学的にはまことに貧弱であったというほかはない。「本草」でなく「湯液」（煎じ薬）という、『東医宝鑑』の篇名が示唆しているように、編者の眼はひたと薬物学のほうに向けられていたのである。そこに朝鮮医学の特色がにじみでているように、わたしには思える。

3　朝鮮の医師と本草

医師であるからには、薬局がとりあつかっている薬物について精しい知識をもっているのは、しごく当然のことであろう。しかし、それはあくまで乾燥その他の処理をへた、加工物である。薬物に精しいからといって、医師がその原動植物を生きている状態で知っているとはかぎらないし、また知っている必要はかならずしもない。薬物への関心とその材料となる原動植物への関心とは、たしかに大きく重なり合っており、だからこそ薬物学のなかから博物学が生まれてくることにもなる。だが、薬効への関心から自由になってしまう博物学が成立するには、薬物への関心とは違ったなにものかが必要である。それは生きている動植物を細部にわたって知りつくしたいという、好奇心と情熱であろう。江戸時代は、このような生きている物への好奇心と情熱が知識人のあいだにみなぎっていた時代であった。むろんそれは知的世界に限定された精神のありかたではなかった。産業と結びつけば、それは物産学になる。吉宗がそこにいた。本草の底辺にはさらに広汎な、半ば趣味に属する、庶民のあいだにまで滲透した、園芸や朝顔・菊など鑑賞用動植物の飼育・栽培の世界が拡がっていた。生きた物へのあくなき関心は、江戸時代を特徴づける精神のひとつのありかたといえるのではあるまいか。

李朝時代の、医師をふくむ、知識人の精神のありかたは、それとは大きく異なっていたようにみえる。そのことが、朝鮮薬材調査の進行に、つねに微妙な影を投げかけているようにみえる。医師についていえば、わたしはいま、医師への薬物の供給はもっぱら薬材商の手にゆだねられていたのではないか、と書いた。いいかえれば、医師たちは一般に、薬物の材料となった、生きている原動植物への知識も関心も、ほとんど持ち合わせていなかったのではないか。そのことを示唆する資料が本書のなかにいくつもみえている。だが、それを拾いあげるまえに、日朝医学の当時の一般的な状況について、簡単にふれておこう。

田代教授は第一章の冒頭につぎのように指摘しておられる。

日本・朝鮮における伝統医学は、ともに中国医学の影響を強くうけながら発展してきた。しかしながら、時期を江戸時代の初めごろ（十七世紀初頭）にかぎってみると、両国の医学の水準には、格段の差があったというのが実情である（一七ページ）。

これはその通りであったろう。十七世紀を通じておこなわれた対馬藩の朝鮮医学受容への努力も、間接にそれを物語っている。この状況はおそらく、十八世紀、吉宗の時代には大きく変化していたであろう。十七世紀の日本の医師たちが、中国医学を摂取し消化するためにおこなった努力、中国医学の研究と教育のためにささげたエネルギーには、目を見張らせるものがある。それをとおして、かれらは中国医学を選択的に摂取し、その体系を組み換え、新しい方法を導入し、しだいに中国医学とは異なる、独自の漢方・鍼灸の医学をつくりだしていったのである。吉宗の時代はその成果が花開いた時期であった。後世派と呼ばれることになるこれらの医師たちが築きあげた土壌のうえに、十八世紀の後半には、いわゆる古方派の華々しい活躍がはじまる。

日朝両国の医学には、それぞれ独自の発展があり、それぞれに得手・不得手とする分野がある。だから全般的な水準を比較することにどれだけ意味があるかわからないが、あえて比較するとすれば、吉宗の時代には両国のそれはかなり

近接していたのではなかろうか。すくなくとも日本のすぐれた医師や本草家たちには、両国の医学の違いとその距離、両国の医学の独自性がはっきり見てとれる、それだけの水準に日本の医学は達していたであろう。

朝鮮の医師たちの本草への関心とその知識という、当面の問題に移ろう。対馬藩では、一六四三年から一六七八年までのあいだに六回にわたり治療（あわせて教育）を目的として、朝鮮医師を招請した（三六―三八ページ）。このいわゆる渡海医官のひとりと対馬の医師たちとの問答が記録されている。

諸医問曰、本草綱目魚部鯛性不見、貝部瀬貝黒胃貝無如何、（本草綱目の魚部には鯛の性はみあたりませんし、貝部には瀬貝・黒胃貝が載っていませんが、いかがでしょう）

鯛を日本ではタイと読んでいるが、これは本草書には載らない小魚の一種である。タイのことは棘鬣魚（きょくりょうぎょ）といい、『政和』や『綱目』にはみえない。瀬貝・黒胃貝というのは日本語だろうか。いずれにしろ本草書にはない。渡海医官の答はこうであった。

対曰、大鱗小鱗大口小口青魚無鱗、是以性同シ、大魚小魚以性知也云々、烏賊大小多其皮色性定也、（三九ページ）

意味はよくわからない。「魚には鱗の大小有無、口の大小、皮の色といろいろあるが、性は同じだ。魚の大小は性でわかる。烏賊は大小種類が多いが、その皮の色で性が決まってくる」といった内容か。性は薬性であろう。それにしても、正直なところ、この答はひどい。知らない、と一言いえばすむところを、肝心の問いにはふれず、わけのわからない一般論をまくしたてて煙に巻き、無知を糊塗しようとする魂胆がみえすいている。もっともこの医者にかぎらず、こうした手合いはどこにでもいるものだ。

享保四年（一七一九）に、吉宗の将軍就任を祝賀する通信使が来日した（以下、八二―八八ページ）。通信使一行には随行の医師団がいる。前年におこなわれた第一次の調査は倭館の日本人の手で、朝鮮で使われている漢字名と和名を対照させたにとどまるという、きわめて不満足な、調査目的からいえば失敗の結果に終わっていた。吉宗は通信使の来訪を

絶好の機会ととらえ、随行医師に薬について質す会合を、四回にわたって開かせた。日本側からは第二次調査の責任者となる林良喜その他の医師や儒者、朝鮮側からは製述官を代表者に、医師や書記、あるときは画家も参加した。このときの医事問答は、参加者の証言によれば、失敗であった。話がまるで嚙み合っていないのである。製述官は日記を残しているが、林等と詩文を応酬したことを満足気に記しているだけで、医事問答には一言もふれていない。どうやら文人交歓の場と心得ていたらしいのだ。薬物などにはまるで関心がなかったにちがいない。

いっぽう対馬の外交官は、二年後に第二次調査の開始にあたって、朝鮮側にこう語った。

去々年信使来聘之時、於本願寺医官林良喜老と申候を被遣候、毎度御尋被成候得共、学士・書記及医員之内精ク存候人も無之、たまたま返答有之候ても不分明候故、此度対州より人を遣し致吟味候様ニとの御事ニて、輪々敷事ニてハ無之候。

べつに対馬藩の文書は、朝鮮の学問について、

御存知之通り、朝鮮之風俗ニて学問仕候者ハ及第の事のミ力を尽し候て、ケ様之事ニ心を用ひ候者少ク、医術いたし候者も存之外大様成事ニて、信使来聘之節等御尋有之候ても分明なざざる事多ク在之段、良喜様ニも御存知可被成と存知候、

と、指摘している。及第はむろん科挙の試験である。また次の回の通信使のとき、医事問答をおこなった本草家の野呂元丈は、「朝鮮医は物産を知らない」といい、坂上善之は「朝鮮医自身は書を読んで医理を論ずるだけで、別に採薬人がいる」と述べているという。

第二次調査の対馬側の責任者であり、のちに報告書を書くことになる越常右衛門は、調査を開始するにあたって、対馬滞在中の渡海訳官使の宿舎に動植物をもちこみ、名称を質した。主として回答したのは随行医師であり、「知っているものがあれば即座に朝鮮語で答え、そのハングル表記と漢名も明らかにした」。田代教授はこう評価される。

質問項目三九種のうち、何らかの回答があったものが二六種、まったく回答が得られなかったのが僅か一三種で、回答率はかなり高いことがわかる。

さらに後の報告書と対比して、こうつけ加えておられる。

……二六種、うち後の報告に採用されたもの一〇種といえば少ないように感じるが、突然の質問に対する回答としては、まずまずの成果というべきであろう。（以上、一四五―一四九ページ）

この評価はやや微妙である。というのは、質問項目三九種にはありふれた動植物が多く、とくに正確な回答とみなされた一〇種のほとんどは、だれでも知っている植物であり、この程度の回答なら動植物についての特別の知識を必要とするとは思えないからだ。「少いように感じる」といわれるその感じのほうが、むしろ妥当な評価ではあるまいか。

第二次調査の朝鮮側の責任者であり、大きな貢献をおこなった訳官の李碩麟は、本草への知識がなかった代わりに、日本側が要請していた「博物多識」のひと五名を協力者として推挙してきた。そのひとり李主簿は、医学の知識はあったらしいが、常右衛門が箱植えの草木類を見せて漢字名を尋ねても、まったく知らない。上級官庁の東萊府が押し付けてきたこの役人の弁明から、はからずも医師と薬材の関係の一部が浮かびあがってくる。

草木之儀、医師ニても見知り候者少ク御座候、薬を取り商買いたし候者ハ間々見知り可申候、慶州と申候所ニ採薬者有之候間、ケ様之者へも見せ申候ハ、相知レ可申哉、

採薬者なら「間々見知り可申候」というのはおかしいが、かなりよく実状を伝えていることばとみていいだろう（二三一―二三三ページ）。

さきの医事問答にかんして対馬藩は、医師のみならず一般に知識人のあいだに、薬物の原料となる動植物にたいする知識や関心が希薄であることを、指摘していた。それはひとり医師の世界を超えて、李朝時代の知識人の精神のありかたにかかわっていた。朝鮮側には、動植物をわざわざ外国にまで出かけて大々的に調査しようという日本側の企画その

ものが、まことに「けったい」な、訝しいことに思えたであろう。一七二一年七月末までに、対馬側は調査の許可と助手役の派遣を東萊府に申請した。しかし、翌月になってもなんの沙汰もない。越常右衛門によれば、

　此一件東萊得と落着不被申色々相疑イ居被申候・・・

という次第がある。田代教授はこう解説しておられる。

　府使としては、江戸の将軍ともあろう方が鳥獣草木のことを知りたがり、朝鮮で実施する調査にまで強い関心を抱いているという対馬藩の説明に、どうしても納得がいかない様子であった。

そして対馬からもちこんだ箱植えの草木を見せてもらいたいと要求してきた。中央政府の許可が下りたことを東萊府が伝えてきたのは、閏七月をはさんで、八月末のことである。日朝間の精神的位相の決定的なずれを調整し、意志を疎通させるのに、まる二か月を要したのである（一八三―一八八ページ）。

　医師や知識人が一般にあまり頼りにならないとすれば、実際の調査にあたって、現物を収集し、それにかんする知識を提供するのにもっとも貢献したのは、いかなる人々だったのだろうか。

4　調査の朝鮮側協力者たち

　朝鮮側の協力者は二つのルートをとおして得られた。一つは、東萊府が任命した助手役の李碩麟の、いわば公式ルートである。かれが推挙した五人の協力者のうち、一人がまるで役に立たなかったことは、すでに述べた。その代りに起用されたのは医師である。この医師は協力を約束し、積極的な姿勢をしめしたが、なにを調査したのか、明らかでない。鳥類にくわしいのは山中に住む僧侶だ、というのでやってきた二僧は、見せられた一二番の剝製のうち、分かったのは三種、しかも後の報告書に採用されたのは一種にすぎなかった。五人目の協力者は、かねて倭館に治療に訪れていた慶州の医師であり、「東萊之採薬者」を介して薬材一〇種を入手し、また黄海道で鴛鴦一羽、蟾一匹を捕獲して、倭館に届

けた。実際に貢献したのはこの医師だけだったことになる（二三一―二三五ページ）。ちなみに、この医師は外科の「巧者」として評判をとっていたという。外科というのは、今日の皮膚科と化膿部の切開のような簡単な手術をおこなう小外科とをあわせた分野にあたる。朝鮮の医学はとくに外科にすぐれていたとされており、対馬藩から倭館に留学していた医学を学ぶ者は外科と鍼灸に集中していたらしい。鍼灸は、日本では独自の発展をみせ、中国の鍼灸とは大きく違う治療法となっていったが、朝鮮ではまた異なる発展があったのだろう。

大活躍したのはむしろ李碩麟自身であった。輩下の通事を巨済島に派遣して麋・麞・麂・蝟を捕獲したり、またべつの通事に甘草を採取させたり、都（漢城）の「尊貴之家」で飼われていた鴛鴦を二番入手したりと、重要な貢献をおこなった。とくに生きたまま入手した鴛鴦は、いまは絶滅したカンムリツクシガモであり、残された三枚の図はこの絶滅種の研究に貴重な資料を提供している（二二六―二二九、二四一―二五三ページ）。

もう一つは、金子九右衛門による別ルートである。金子は「薬材等之儀内々心掛吟味仕候人」で、倭館での身分は「別町二代官手代」であった。田代教授の説明をうまく要約できそうにないから、そのまま引用する。

別代官とは、朝鮮貿易のうち商人と相対で行う私貿易を専門に担当する役人のことである。上職は勘定方の役人から選ばれるが、その配下に商人から選抜された町代官が配属される。そのうち手代は、いわば雑務を担当する役人であるが、別代官の役職じだいが、貿易会所となる開市大庁で業務を担当するため、当然のように出入り商人と顔馴染みになる機会が多かった。金子九右衛門は、薬材への興味から、個人的にこの方面に詳しい人脈を摑んでいたようである。（二一〇ページ）

金子のルートは公式ルートが開かれる以前に活動を開始した。主な協力者は「東萊薬店」許裨将と李僉知であった。この二人は、田代教授によれば「東萊に薬材を取り扱う同業者組合」があり、その一員であったろうという。この両人が倭館に搬入した薬材は、漢名項目三九種、和名項目一種、項目外二種の四二種にのぼり、それに金子が採取した民魚

（22 鮰魚）をくわえると、「別ルートの調達薬材は漢名項目だけで四〇種」に達した（二三六―二四〇ページ）。

両ルートを通じた漢名項目の調達数をまとめると、次のようになる（二五五ページ）。

調達総数六十九種
- 別ルート　四十種
  - 李碩麟ルート二十三種
  - ルート不明　十七種
- 重複十一種

未調達数三十五種
- 調達依頼なし二種
- 調達不能　三十三種

李碩麟ルートのうち一〇種は採薬者を介しているから、李等が直接に捕獲・採集・入手したものをのぞき、大部分は薬材商が提供したと想定しても差支えあるまい。医師や知識人の寄与はほとんど無きにひとしい。

逆に朝鮮国が日本薬材調査を実施したとしたら、どうだろう。多くの医師や本草家がそれに協力し、薬材商の手を借りることはむしろ少かったのではなかろうか。

5　むすび

田代教授による朝鮮薬材調査の研究がくっきりと浮かびあがらせたのは、この画期的事業をとおして明らかになった日朝両国の学問のあり方の違い、あるいはもっと広げていえば、知識人の精神的位相のずれである。

日本にとって朝鮮は学問や文芸の師であった。そして、師の知的関心や学問のめざす方向が日本のそれと同じであると期待し、それを学ぼうとした。調査の許可を求めて対馬側が朝鮮側に伝えた口上に、幕府から「博物多識之人相招、対面之上相尋候様ニと被申渡」ている、ということばがあった（一八五ページ）。日本人が考えるような意味での「博物多識の人」（「博物」の「物」はもともとは「事」を意味する）が朝鮮にもいると想定し、そうした人たちに教えを乞う、という発想である。ところが実際に調査に着手してみると、「博物」どころか「物」の知識や「物」への関心をほとんどもた

ない医師や知識人に直面することになる。薬材調査、すなわち博物学としての本草研究の意図と意義さえ、容易にはわかってくれない人たちである。医事問答や聞き取り調査の不首尾の原因はそこにあった。

朝鮮の学問のこうしたありかたを、対馬藩は科挙試験のせいとみた。ひとつの要因としてはそれもあるだろう。しかし、科挙の本場の中国では事情は異なる。その根拠はもっと深いところにあるようにわたしには思える。韓国の科学が官僚制のなかのいわば極限された科学であったとは、よく指摘されるところである。政治技術と結びついた実践的性格、量的な観測や測定の偏重、理論の軽視などといった特徴が、そこから生じたというのだ。[4] だが、それは一面にすぎないだろう。

朝鮮の思想界を主導した朱子学派が長期にわたって展開した理発気発論争は、朱熹の説に可能性として潜在していた存在論的および認識論的な問題を、理論的につきつめていったものであり。その提出する問題と論理の尖鋭さは、日本朱子学派の遠く及ぶところではなかった。いや、日本の朱子学者なら、問題をそのように捉えることさえ、思い浮かばなかったであろう。このような理論的思索の風土にあってこそ、たとえば数学の分野には、象数易の理論に立って数学を体系的に構成しようとした、崔錫鼎（一六四五―一七一五）の『九数略』のような試みがあらわれ、天文学の分野には、気の無限宇宙論に大胆な思索をすすめた、洪大容（一七三一―一七八三）の『毉山問答』のような著作が生まれたのである。それは博物学へ向かう精神のあり方とは対極に立つものであり、朝鮮の科学を支えた精神のひとつの位相であった、とわたしは考える。

近代科学は学者的伝統と職人的伝統が合体したころに生まれた、という説を借りていえば、朝鮮の科学を特徴づけていたのは、この二つの伝統の決定的な断絶[5]ではあるまいか。学者的伝統は官僚制のなかの科学としてのみ生きながらえ、市井に息づく職人の技術と交わることはなかった。医学の分野では、それは医師と採薬者・薬材商との社会的分離、両者のあいだの知識の分断となってあらわれたのである。朝鮮薬材調査はその事態を白日の下にさらしたのであった。

朝鮮薬材調査はやがて吉宗による全国的な物産調査へと発展し、日本の物産学・博物学の歴史の決定的な一段階を導

くことになる。だがそれは、朝鮮の科学の歴史には、おそらく小さな波紋ひとつ落とすことなく終わったのではあるまいか。

注

(1) 李徳鳳「韓国生物学史」、『韓国文化史大系』Ⅲ・科学技術史、高麗大学校民族文化研究所、一九六八、三九〇―三九四頁。

(2) 盧正祐「韓国医学史」、同、八〇〇―八〇七頁。また、三木栄「車医宝鑑」、『科学史技術史辞典』。弘文堂、一九九七縮刷版、七一一―七一二頁を参照。

(3) 文献の引用によって構成されていても、その引用文の選択と再構成のしかたのなかに、いかに編者の個性、さらには編者に体現されている文化の個性が表現されるかについては、山田慶兒「日本医学事始　予告の書としての『医心方』」、山田慶兒・栗山茂久編『歴史の中の病と医学』、思文閣出版、一九九七、三―三三ページ、を参照。外国の文献に依拠しているかいないかだけでなく、もっとそうした点が分析され、評価されていい。科学史研究は、いつまでも世界水準主義・オリジナリティー評価主義（要するに結果主義）にひきずられるのでなく、科学を人間のもっとも基本的な行動の一形態として捉え、それを文化全体のなかに位置づけて、その具体的なありかたを内と外から解明してゆく立場を確立すべきであろう。いわば文化内在主義の立場である。比較研究はそのうえではじめて意味をもつ。

(4) 前掲『科学史技術史辞典』、弘文堂、二二四―二三一頁。

(5) 全相運「韓国の科学と技術」、同、二二六頁を参照。